

非行傾向行為の抑止要因としてのセルフコントロールと 家族関係に対する居場所感についての検討

荒居 知佳・石津憲一郎

非行傾向行為の抑止要因としてのセルフコントロールと 家族関係に対する居場所感についての検討

荒居 知佳・石津憲一郎

The Examination about self-control as Deterrence-Factors of adolescent delinquency and Sense of IBASYO of family relations.

Chika Arai, Kenichiro ISHIZU

キーワード：非行，非行傾向行為，セルフコントロール，居場所感

Keywords : delinquency, tendency of delinquent act, self-control, sense of IBASYO

問題と目的

近年，少年による犯罪への注目が増している。メディアの発達により情報を得る機会が増え，マスコミによるセンセーショナルな報道もあり，世間の少年非行への目は厳しくなっている。犯罪白書（2011）によると，一般刑法犯検挙人員は少年が最も高く，全体の26.8%を占めている。その中でも中学生に当たる14・15歳の少年の検挙人員は12.1%であり，うち62.5%は保護処分歴のない少年であることから，青年期にあたるこの時期は，非行の好発時期であるといえる。文部科学省が平成24年度に行った調査によると，小・中・高等学校における暴力行為の発生件数は約5万6千件であった。加害児童生徒のうち関係機関（警察等の刑事司法機関等）により何らかの措置がとられた児童生徒は，小学校で126人，中学校で3,711人，高等学校で537人であった（文部科学省初等中等教育児童生徒課，2013）。このことから，中学生にあたる時期は非行の好発時期ということができ，学校現場でも，中学校における非行問題は重大な課題である。ではなぜ，非行が発生するのか。非行の規定要因について，これまでさまざまな調査・研究が行われてきた。非行少年の特徴として，セルフコントロールの低さ（Gottfredson & Hirschi, 1996; 金子, 2012）や，衝動性の高さが指摘されている（清水, 1999; 金子, 2012）。森下（2004）は，非行行動の程度と攻撃性，非社会性との関連を示し，さらに親子関係は全ての非行行動とその程度に関連することを明らかにした。また，小保方・無藤（2005a）は，非行傾向行為のある友人，つまり逸脱した友人の存在が非行傾向行為に影響を及ぼすことを明らかにした。その他にも，非行傾向行為の先行要因として，同調行動の多さ（越智, 2004; 小保方・無藤, 2005b）や抑うつの高さが指摘されている（小保方・無藤, 2005b）。

しかし，これらの非行を規定するとされる要因を持ちながらも非行に走らない子どもたちもいる。小保方・無藤（2005a）によると，非行傾向行為の規定要因である「逸脱した友人の存在」がありながらも非行傾向行為を行っていない子どもは，セルフコントロールが高く，両親との関係が親密であるという結果が得られた。

そこで本研究では，非行を抑止すると考えられるセルフコントロールに着目する。森下（1999）は，幼児期において，自己制御が高いと攻撃性が低くなることを明らかにし，さらに親子関係と自己制御との関連性を示した。崔・庄司（2009）では，親の養育態度とセルフコントロールの関連を日本と中国の比較に基づいて検討した。その結果，日本の中学生は一人っ子より兄弟のいる子どもの方が，セルフコントロールが高く，また親の受容的な養育態度はセルフコントロールを高め，反対に支配的な養育態度はセルフコントロールを低めることが分かった。これらの結果から，家族や両親の存在がセルフコントロールの発達に重要な役割を果たすと考えられる。

しかし，平成16年版犯罪白書（2004）にある「少年院新入院者の非行時における家族との同居率の推移」統計によると，昭和59（1984）年には家族と同居していたのが男子で約60%，女子で約40%であったが，平成15（2003）年には，男子約82%，女子約68%に増加している。このことから，物理的に居場所があるにもかかわらず非行を犯してしまう少年が増えたことや，家族の存在が必ずしも非行に対するブレーキの役割を果たし得ないことが考えられる（藤川, 2005）。さらに，たとえ人と一緒にいても，その相手が心の通わない人である場合，心理的にひとりであるという状況が成立し，「こころの居場所がない」といった感覚と繋がっていくことから，心理的居場所感を“心の拠り所となる関係性，および，安心感があり，ありのままの自分を受容される場があるという感情”と定義し，その下位概念として，“安心感”，

“被受容感”，“本来感”，“役割感”を見出した。つまり，家族がいて帰る家があるだけでなく，その家族と心が通い，安心できる感覚を抱くことで，子どもは家庭において“居場所がある”と感ずることができるのだろう。

人は安全が確保されてはじめて，自分が自分をコントロールできる感ずを持つことができる（藤川，2005）。また，児童において，不安が自己制御に負の影響を及ぼすことも明らかになっている（矢川・森下，1999）。つまり，家族の存在そのものがセルフコントロールに影響を及ぼすのではなく，その子が家族を安全で安心できる存在として捉え，家族の中に心理的な居場所があると感ずていることがセルフコントロールを高める要因となるのではないかと想定される。森下（2003）が，幼稚園児を対象に，幼児の自己制御機能の発達に関する研究を行った結果，家庭でも園でも，自己制御のうち自己抑制の高い子どもの父母は共に受容的であった。このことから，父母をはじめとする家族に受け入れられているという感ずと自己制御には何らかの関連があると考えられる。

松木（2011）では，大学生の女性において，家族関係の中で心理的な居場所をもつことが，攻撃性を基底とする様々な不適応行動の抑制に効果的であることが示唆された。また，石本（2010）では，中学生において，居場所感が学校適応に影響していることが示された。特に中学生男子では，家族本来感が学校生活享受感に影響を与えていることが明らかになった。さらに，青年期を対象に発達に伴いどのような心理的居場所を持ってきたかについて調査した光元・岡本（2010）は，母親に対する心理的居場所感が心理的居場所の広がりや心理社会的発達課題の達成において重要であることを明らかにした。このことから，母親を含む家族関係に対して居場所感が学校や友人関係に対する居場所感の基盤となる可能性が示唆され，家族関係に対する居場所感があらゆる関係に対する居場所感の中でも最も重要であると考えられる。

以上より，本研究の目的は，非行傾向行為の抑止要因として働くセルフコントロールを規定する要因として，家族関係における居場所感を想定し，非行傾向行為とセルフコントロール，家族関係における居場所感との関連を明らかにすることである。

小保方・無藤（2005b）では，夏休みは自由に行動ができ友人と過ごす時間が増加するため，子どもの行動の変化に影響を与えやすい時期として学校現場では指摘されていることから，中学生の非行傾向行為の変化について，夏休みを挟んだ1学期と2学期の両学期に調査を行っている。そこで，本研究でも，1学期と2学期の両学期に渡る短期縦断調査を行うことで，非行傾向行為を開始した子どもが開始後に，非行傾向行為をやめた子どもがやめた後に，セルフコントロールと家族関係における居場所感にどのような変化がみられたのかについても検討できる。さらに，1学期，2学期ともに非行傾向行為を行っ

ていない子どもを“経験なし群”，1学期，2学期ともに非行傾向行為を行っている子どもを“継続群”，1学期に非行傾向行為を行っているが，2学期には非行傾向行為を行っていない子どもを“経験群”，1学期に非行傾向行為を行っていないが，2学期に非行傾向行為を行っている子どもを“開始群”として群分けし，群ごとの特徴を明らかにする。

また，1学期の非行傾向行為とセルフコントロールおよび家族関係における居場所感が，2学期の非行傾向行為とセルフコントロールおよび家族関係における居場所感にどのような影響を及ぼすのかを検討する。

方法

対象者

北陸地方の公立中学校3校の1～3年生1777名を対象とし，クラスごとの一斉法により無記名式で調査を実施した。回収率は1学期95.6%，2学期96.1%であった。分析対象は全調査対象のうち無回答の項目があるものや，回答内容に不備のあったものなどを除き，さらに，両学期の調査に回答している子どもを分析対象とした。結果，1192名分のデータ（1年生男子198名，女子189名，2年生男子163名，女子222名，3年生男子202名，女子218名）を分析対象とした。

手続き

2013年6月（1学期）と9月（2学期）に質問紙調査を行った。1学期，2学期ともに対象者は同じである。質問紙，実施方法の説明を学校に郵送し，担任教師によるクラスごとの実施を依頼した。回答内容の秘密を保持するために調査票とともに封筒を配布した。対象者は調査票を記入した後，各自で調査票を封筒に入れた上で提出した。なお，調査は無記名で行った。

調査内容

1) フェイスシート

本アンケートの概要を記したのち，回答にあたって，本アンケートへの回答は強制ではないこと，内容や個人情報保護されること，成績にはいっさい関係のないこと，回答には正解，不正解はないことを教示した。次に，年齢，クラス&出席番号，性別の順で回答を求めた。クラス&出席番号については，1学期と2学期のアンケートを対応させるためのものであり，個人の特定は行わないことを明記した。

2) 非行傾向行為の経験の有無（11項目）

非行傾向行為の項目内容は，小保方・無藤（2005a，2005b）の非行傾向行為の経験の有無に関する項目と加藤・大久保（2006）の〈問題行動〉の経験から6項目を選定し，ダミー項目5項目を加えて作成した。各項目について，学期間での行動の変化を検討するため，調査1回目から2回目までの期間3ヵ月間での経験者に絞って

Table 1 各合成変数の平均値および標準偏差

	1 学期		2 学期	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
低セルフコントロール	10.47	2.88	10.59	2.90
役割感	18.64	4.75	18.69	4.77
安心感	20.84	4.66	20.79	4.59
本来感	23.69	6.07	23.57	6.03
被受容感	15.94	3.89	15.86	3.84

分析を行う必要があることから、“あなたは次の行動をここ3ヶ月のうちにしたことがありますか”という教示に対し“ある”、“ない”の2件法で回答を求めた。

3) セルフコントロール (9項目)

Grasmick, Tittle, Bursik, & Arneklev (1993) が用いた低セルフコントロール尺度の24項目のうち、小保方・無藤 (2005a, 2005b) を参考に5項目を選定・加筆修正し、ダミー項目4項目を加えて作成した。各項目について“いいえ(1点)”, “どちらかといえばいいえ(2点)”, “どちらかといえばはい(3点)”, “はい(4点)”の4件法で回答を求めた。低セルフコントロール尺度であるので、得点が高いほどセルフコントロールが低くなる。

4) 家族関係における居場所感 (20項目)

青年版心理的居場所感尺度(則定, 2007)を使用。各項目について“あなたがふだん、家族(ふだん一緒に生活している人)に対して感じていることを教えてください”という教示を与え、家族について回答を求めた。“まったくあてはまらない(1点)”, “あまりあてはまらない(2点)”, “どちらともいえない(3点)”, “ややあてはまる(4点)”, “とてもあてはまる(5点)”の5件法で回答を求めた。

結果と考察

合成変数の作成

調査で使用した各項目の因子構造を明らかにするために、各項目の粗点に基づいて、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った。非行傾向行為は、“ない”、“ある”の0, 1のカテゴリカルデータであるため対応分析を行った。

1) 非行傾向行為

対応分析を行った。カテゴリ数量化の値が第1次元で“ない”が、0.09~0.24であり、“ある”が-16.37~-1.11であったので、それぞれのカテゴリで対応が確認された。しかし、 $\alpha = .43$ であったため、再度“ある”のみで対応分析を行ったところ、1項目を除き、カテゴリ数量化の値が第1次元で-1.77~-1.21であったため、1項目を削除した。よって、本尺度は1因子5項目構造であるとみなした。 $\alpha = .64$ であった。 α 係数が.70に満たないが分析に必要な変数であるため採用した。

2) 低セルフコントロール

1因子を意図している尺度であるため、因子固有数を1に設定し、1因子5項目が抽出された(26.60%)。 $\alpha = .64$ であった。 α 係数が.70に満たないが分析に必要な変数であるため採用した。

3) 家族関係に対する居場所感

4因子を意図している尺度であるため、因子固有数を4に設定し、4因子20項目が抽出された。則定(2007)にならい、第1因子を“役割感”、第2因子を“安心感”、第3因子を“本来感”、第4因子を“被受容感”とした。第1因子 $\alpha = .93$ 、第2因子 $\alpha = .94$ 、第3因子 $\alpha = .95$ 、第4因子 $\alpha = .94$ であった。

各合成変数の平均値および標準偏差をTable 1に示す。

非行傾向行為の経験者：1学期と2学期

これまでの非行傾向行為の経験について“ある”と答えた者の人数と割合をTable 2に示す。

非行傾向行為のタイプ別による分析

(1) 非行傾向行為の経験の群分け

非行傾向行為の項目について、一つでも当てはまる項目のある子どもを非行傾向行為の経験ありとした。小保方・無藤(2005a, 2005b)にならい、非行傾向行為について、どちらの学期においても経験が“ない”子どもを“経験なし群”、どちらの学期においても経験が“ある”子どもを“継続群”、1学期の時点で経験が“ある”が、2学期は経験が“ない”子どもを“経験群”、1学期は経験が“ない”が、2学期は経験が“ある”子どもを“開始群”とした。“経験なし群”(これまで全く経験がない)が1,105人、“継続群”(1学期2学期ともに経験がある)が18人、“経験群”(1学期にのみ経験がある)が27人、“開始群”(2学期以降に開始した)が42人であった(Table 3)。

(2) 分散分析

1 学期の分析

非行傾向行為のタイプ別にどのような特徴があるのかを検討するために、1学期に測定した変数について、性別、学年、非行傾向行為の経験を独立変数、1学期の低セルフコントロール、1学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”、“安心感”、“本来感”、“被受容感”を従属変数とした三元配置の分散分析を行った。

非行傾向行為の経験の主効果がみられた場合にのみ結

Table 2 非行傾向行為の経験の“あり”の人数と% (性別, 学年別)

	1 学期	1 年		2 年		3 年	
		男	女	男	女	男	女
よその人の自転車を盗んだり, 勝手に使ったりする	人数	3	0	1	2	3	0
	%	0.25	0	0.08	0.17	0.25	0
病気などの理由がないのに学校をさぼる	人数	4	2	6	8	6	2
	%	0.34	0.17	0.5	0.67	0.5	0.17
店の品物を, お金を払わずにもってくる	人数	3	1	2	2	2	0
	%	0.25	0.08	0.17	0.17	0.17	0
たばこを吸う	人数	2	0	1	1	1	0
	%	0.17	0	0.08	0.08	0.08	0
親にかくれて, お酒を飲む	人数	3	0	0	4	3	2
	%	0.25	0	0	0.34	0.25	0.17
	2 学期	1 年		2 年		3 年	
		男	女	男	女	男	女
よその人の自転車を盗んだり, 勝手に使ったりする	人数	3	0	2	1	10	0
	%	0.25	0	0.17	0.08	0.84	0
病気などの理由がないのに学校をさぼる	人数	6	2	4	7	14	5
	%	0.5	0.17	0.34	0.59	1.17	0.42
店の品物を, お金を使わずにもってくる	人数	2	1	0	2	6	0
	%	0.17	0.08	0	0.17	0.5	0
たばこを吸う	人数	0	0	0	1	8	0
	%	0	0	0	0.08	0.67	0
親にかくれて, お酒を飲む	人数	4	0	0	4	12	5
	%	0.34	0	0	0.34	1.01	0.42

Table 3 非行傾向行為の経験による群ごとの人数 (性別, 学年別)

	1 年		2 年		3 年		合計
	男	女	男	女	男	女	
経験なし群	186	184	153	202	174	206	1105
継続群	2	1	2	5	7	1	18
経験群	2	2	4	9	7	3	27
開始群	8	2	4	6	14	8	42

果に言及し, 多重比較を行った。多重比較には Scheffe 法を採用した。1 学期に測定した各合成変数の平均値, 標準偏差および F 値を Table 4 に示す。

低セルフコントロール

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=10.31, p<.01$), 多重比較の結果, 経験なし群は継続群, 経験群, 開始群よりも有意に低セルフコントロールが低かった。

家族関係に対する居場所感

(a) 役割感

非行の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=6.05, p<.01$), 多重比較の結果, 経験なし群は経験群よりも役割感が有意に高かった。性別と学年と非行傾向行為の経験の 2 次の交互作用が有意であった ($F(6,1168)=2.52, p<.05$) ため, 下位検定を行ったところ, 女子の 1 年生, 3 年生において単純・単純主効果が有意であった (女子; 1 年 生 $F(3,1168)=4.01, p<.01$, 3 年 生 $F(3,1168)=5.66, p<.01$)。多重比較の結果, 女子の 1 年生において経験な

し群と開始群は継続群よりも, 3 年生において経験なし群は経験群よりも役割感が有意に高かった。

(b) 安心感

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=6.16, p<.01$), 多重比較の結果, 経験なし群は継続群, 経験群, 開始群よりも安心感が有意に高かった。

(c) 本来感

非行の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=3.57, p<.05$), 多重比較の結果, 経験なし群は継続群より本来感が有意に高かった。

(d) 被受容感

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=6.99, p<.01$), 多重比較の結果, 経験なし群は経験群よりも有意に被受容感が高かった。性別と非行傾向行為の経験の交互作用が有意であった ($F(3,1168)=2.73, p<.05$) ため, 単純主効果の検定を行ったところ, 女子において非行傾向行為の単純主効果が有意であり ($F(3,1168)=6.96, p<.01$), 多重比較の結果, 女子におい

Table 4 1学期の各合成変数の平均値および標準偏差と分散分析結果 (性別, 学年別, 非行傾向行為の経験群別)

群	学年	性別	低セルフ コントロール	役割感	安心感	本来感	被受容感
			<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>
経験なし群	1年	男	10.35 (2.89)	20.03 (4.55)	21.92 (3.76)	25.15 (5.20)	16.68 (3.60)
		女	9.28 (2.52)	19.65 (4.30)	21.95 (4.06)	25.34 (5.34)	16.76 (3.48)
	2年	男	11.04 (2.57)	18.54 (4.36)	20.48 (4.48)	22.53 (5.90)	15.59 (3.75)
		女	10.42 (2.97)	18.26 (5.00)	20.72 (5.00)	23.26 (6.65)	15.94 (4.07)
	3年	男	10.90 (2.79)	18.32 (4.73)	20.16 (4.73)	22.76 (5.85)	15.60 (3.72)
		女	10.05 (2.54)	18.02 (4.47)	20.94 (4.37)	24.01 (5.74)	15.84 (3.83)
合計			10.31 (2.78)	18.79 (4.64)	21.05 (4.46)	28.29 (5.89)	16.08 (3.77)
継続群	1年	男	15.00 (0.00)	18.50 (9.19)	18.50 (9.19)	23.00 (9.90)	15.00 (7.07)
		女	14.00 (.)	7.00 (.)	16.00 (.)	10.00 (.)	7.00 (.)
	2年	男	12.50 (6.36)	19.00 (1.41)	20.00 (0.00)	24.50 (0.71)	16.00 (0.00)
		女	11.80 (2.17)	19.40 (4.16)	21.20 (5.31)	24.40 (7.37)	16.40 (4.51)
	3年	男	13.86 (1.68)	16.57 (4.35)	16.29 (5.79)	19.43 (5.41)	13.71 (3.20)
		女	16.00 (.)	10.00 (.)	10.00 (.)	15.00 (.)	8.00 (.)
合計			13.39 (2.48)	16.94 (5.21)	17.94 (5.67)	21.00 (6.67)	14.17 (4.31)
経験群	1年	男	11.00 (1.41)	20.50 (0.71)	23.00 (2.83)	26.50 (0.71)	17.00 (0.00)
		女	12.50 (4.95)	14.50 (0.71)	21.00 (5.66)	27.00 (4.24)	14.50 (3.54)
	2年	男	11.75 (5.12)	15.75 (7.80)	18.00 (5.29)	19.75 (9.46)	12.50 (5.20)
		女	13.56 (2.70)	14.67 (5.07)	15.89 (7.22)	18.22 (9.48)	12.11 (4.96)
	3年	男	14.29 (3.09)	17.14 (6.72)	17.86 (6.62)	20.71 (8.34)	13.43 (5.16)
		女	10.33 (2.31)	9.00 (2.65)	14.67 (8.74)	14.67 (8.50)	9.00 (4.58)
合計			12.85 (3.29)	15.26 (5.81)	17.48 (6.48)	19.96 (8.48)	12.70 (4.74)
開始群	1年	男	9.38 (3.96)	16.13 (7.86)	17.25 (8.50)	20.50 (10.04)	13.13 (6.71)
		女	10.50 (0.71)	24.50 (0.71)	24.00 (1.41)	30.00 (0.00)	19.00 (1.41)
	2年	男	11.50 (3.11)	16.00 (8.41)	16.75 (8.88)	19.50 (10.08)	13.25 (7.27)
		女	12.17 (1.17)	18.83 (4.17)	20.50 (4.32)	24.33 (5.43)	16.00 (3.41)
	3年	男	13.79 (4.02)	18.86 (5.25)	19.64 (5.17)	23.07 (6.40)	16.07 (4.32)
		女	12.00 (3.66)	15.00 (2.73)	17.38 (5.42)	19.00 (6.65)	13.88 (3.68)
合計			12.00 (3.68)	17.60 (5.74)	18.81 (6.10)	21.98 (7.48)	14.95 (4.88)
F 値	性別		0.15	5.05*	0.24	0.65	1.95
	学年		1.36	2.55	3.88*	2.66	1.95
	非行傾向行為の経験		10.31**	6.05**	6.16**	3.57*	6.99**
	性別×学年		0.68	3.03*	1.62	1.28	2.40
	学年×非行傾向行為の経験		1.25	1.36	1.45	1.93	1.49
	性別×非行傾向行為の経験		0.41	3.85**	1.64	2.03	2.73*
	性別×学年× 非行傾向行為の経験		1.34	2.52*	1.43	2.00	1.67

** $p < .01$ * $p < .05$

※開始群における1年女子と3年女子は、該当者が1人であったため、標準偏差は算出されなかった。

て経験なし群は継続群、経験群よりも有意に被受容感が高かった。

2 学期の分析

非行傾向行為のタイプ別にどのような特徴があるのかを検討するために、2学期に測定した変数について、性別、学年、非行傾向行為の経験を独立変数、2学期の低セルフコントロール、2学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”・“安心感”・“本来感”・“被受容感”を

従属変数とした三元配置の分散分析を行った。非行傾向行為の経験の主効果がみられた場合にのみ結果に言及し、多重比較を行った。多重比較には Scheffe 法を採用した。2学期に測定した各合成変数の平均値、標準偏差および F 値を Table 5 に示す。

低セルフコントロール

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168) = 9.99, p < .01$)、多重比較の結果、継続群、経験群、開始

Table 5 2学期の各合成変数の平均値および標準偏差と分散分析結果 (性別, 学年別, 非行傾向行為の経験群別)

群	学年	性別	低セルフ コントロール	役割感	安心感	本来感	被受容感
			<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>	<i>M (SD)</i>
経験なし群	1年	男	10.53 (3.02)	20.26 (4.55)	21.97 (4.06)	25.41 (5.28)	16.84 (3.74)
		女	9.47 (2.61)	19.54 (4.26)	22.03 (3.77)	25.13 (5.25)	16.38 (3.51)
	2年	男	11.00 (2.86)	18.56 (4.59)	20.46 (4.33)	22.92 (5.61)	15.97 (3.51)
		女	10.32 (2.79)	17.98 (4.85)	20.39 (4.98)	22.88 (6.58)	15.66 (3.95)
	3年	男	11.46 (2.64)	18.47 (4.98)	19.99 (4.92)	22.53 (6.17)	15.33 (3.99)
		女	10.04 (2.62)	18.24 (4.48)	20.96 (4.20)	23.67 (5.52)	15.84 (3.56)
合計			10.44 (2.82)	18.83 (4.68)	20.98 (4.46)	23.78 (5.86)	16.00 (3.75)
継続群	1年	男	15.50 (3.54)	17.50 (9.19)	19.50 (7.78)	24.00 (8.49)	14.00 (8.49)
		女	14.00 (.)	5.00 (.)	22.00 (.)	15.00 (.)	9.00 (.)
	2年	男	13.50 (3.54)	19.00 (1.41)	20.00 (1.41)	23.50 (0.71)	15.00 (1.41)
		女	10.60 (1.52)	17.60 (5.81)	18.40 (6.84)	22.60 (7.30)	14.80 (5.07)
	3年	男	13.86 (3.44)	15.14 (6.89)	15.14 (7.54)	16.00 (9.04)	12.14 (5.30)
		女	15.00 (.)	8.00 (.)	13.00 (.)	12.00 (.)	8.00 (.)
合計			13.17 (3.03)	15.56 (6.55)	17.33 (6.39)	19.28 (7.89)	13.00 (4.96)
経験群	1年	男	12.50 (0.71)	22.50 (0.71)	25.00 (0.00)	29.50 (0.71)	19.50 (0.71)
		女	12.00 (2.83)	15.50 (0.71)	23.00 (1.41)	27.50 (3.54)	16.50 (4.95)
	2年	男	12.75 (2.87)	19.00 (3.37)	19.75 (3.95)	22.50 (5.07)	14.50 (3.70)
		女	12.33 (2.06)	16.22 (4.09)	17.67 (5.57)	20.44 (7.65)	14.00 (3.35)
	3年	男	12.14 (3.34)	18.14 (3.02)	18.86 (3.58)	22.00 (4.69)	14.86 (3.02)
		女	12.33 (3.21)	12.33 (3.21)	14.33 (2.31)	16.67 (5.13)	11.00 (1.73)
合計			12.33 (2.45)	17.11 (3.95)	18.85 (4.69)	21.93 (6.28)	14.56 (3.48)
開始群	1年	男	10.88 (5.36)	18.00 (6.74)	20.25 (5.04)	21.13 (8.18)	13.75 (5.70)
		女	10.00 (4.24)	21.00 (5.66)	25.00 (0.00)	30.00 (0.00)	18.00 (2.83)
	2年	男	12.50 (2.38)	17.00 (8.52)	17.00 (6.16)	20.25 (9.95)	13.25 (6.80)
		女	12.17 (3.19)	20.50 (6.09)	21.00 (6.66)	25.17 (7.76)	15.83 (6.01)
	3年	男	14.36 (3.03)	17.21 (4.98)	17.71 (5.11)	20.64 (7.11)	14.43 (4.18)
		女	11.50 (2.39)	13.38 (4.87)	15.63 (6.00)	16.50 (8.11)	12.75 (5.04)
合計			12.45 (3.62)	17.26 (5.96)	18.55 (5.70)	21.00 (7.99)	14.24 (5.01)
F 値	性別		2.51	8.96**	0.04	0.74	1.51
	学年		0.72	4.43*	9.47**	7.54**	3.44*
	非行傾向行為の経験		9.99**	5.33**	3.04*	3.11*	5.12**
	性別×学年		0.04	2.18	0.96	0.91	1.22
	学年×非行傾向行為の経験		0.87	2.21*	2.12*	2.38*	1.27
	性別×非行傾向行為の経験		0.17	3.55*	1.29	1.78	1.76
	性別×学年× 非行傾向行為の経験		0.46	1.50	1.19	1.82	1.28

** $p<.01$ * $p<.05$

※開始群における1年女子と3年女子は、該当者が1人であったため、標準偏差は算出されなかった。

群は経験なし群よりも有意に低セルフコントロールが高かった。

家族関係に対する居場所感

(a) 役割感

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=5.33, p<.01$), 経験なし群は継続群よりも有意に役割感が高かった。学年と非行傾向行為の経験の交互作用が有意であった ($F(6,1168)=2.21, p<.05$) ため、単純主効

果の検定を行ったところ、1年生、3年生における非行傾向行為の経験の単純主効果が有意であった (1年生 $F(3,1168)=3.08, p<.05$, 3年生 $F(3,1168)=6.16, p<.01$)。多重比較の結果、1年生において経験なし群は継続群より、3年生において経験なし群は継続群と開始群よりも有意に役割感が高かった。性別と非行傾向行為の経験の交互作用が有意であった ($F(3,1168)=3.55, p<.05$) ため、単純主効果の検定を行ったところ、女子において単純主

効果が有意であった ($F(3,1168)=6.49, p<.01$)。多重比較の結果、女子において経験なし群と開始群は継続群よりも有意に役割感が高かった。

(b) 安心感

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=3.04, p<.05$)、経験なし群は継続群と開始群よりも有意に安心感が高かった。学年と非行傾向行為の経験の交互作用が有意であった ($F(6,1168)=2.12, p<.05$) ため、単純主効果の検定を行ったところ、3年生における非行傾向行為の経験の単純主効果が有意であった ($F(3,1168)=8.69, p<.01$)。多重比較の結果、3年生において経験なし群は継続群と開始群よりも有意に安心感が高かった。

(c) 本来感

非行の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=3.11, p<.05$)、経験なし群は継続群と開始群よりも有意に本来感が高かった。学年と非行傾向行為の経験の交互作用が有意であった ($F(6,1168)=2.38, p<.05$) ため、単純主効果の検定を行ったところ、3年生における非行傾向行為の経験の単純主効果が有意であった ($F(3,1168)=7.44, p<.01$)。多重比較の結果、3年生において経験なし群は継続群と開始群よりも有意に本来感が高かった。

(d) 被受容感

非行傾向行為の経験の主効果がみられ ($F(3,1168)=5.12, p<.01$)、多重比較の結果、経験なし群は継続群と開始群よりも有意に被受容感が高かった。

判別分析

低セルフコントロールと、家族関係に対する居場所感の“役割感”、“安心感”、“本来感”、“被受容感”が非行傾向行為の有無を予測するかを調べるため、ステップワイズ法による判別分析を行った。各非行傾向行為の有無に関しては、非行傾向行為の項目について、一つでも当てはまる項目のある子どもを非行傾向行為の経験あり群、それ以外を非行傾向行為の経験なし群とした。

まず、1学期の低セルフコントロールと、1学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”、“安心感”、“本来感”、“被受容感”が1学期の非行傾向行為の有無を予測するかを調べるため、1学期の低セルフコントロールと、1学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”、“安心感”、“本来感”、“被受容感”を独立変数、1学期の非行傾向行為の有無を従属変数とした分析を行った。その結果、1学期の“低セルフコントロール”、1学期の居場所感の“安心感”の2変数で Wilks'λ が有意であった (低セルフコントロール Wilks'λ=.96, $p<.01$, 安心感 Wilks'λ=.95, $p<.01$)。標準化された正準判別関数係数は、“低セルフコントロール”が .86, “安心感”が -.35 であり、グループ重心の関数は、非行傾向行為“なし群”が -.11, 非行傾向行為“あり群”が .46 であった (Wilks'λ=.95, $p<.01$)。この結果は、低セルフコントロールが高く安心感が低いと非行傾向行為“あり群”判別され、反対に低セルフコントロールが低く安心感が高いと非行傾向行為“なし群”に判別されるということを示している。判別率的中率は、“なし群”が 61.9%，“あり群”が 56.7%、全体では 60.9%であった (Table 6)。

2学期の低セルフコントロールと、2学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”、“安心感”、“本来感”、“被受容感”が2学期の非行傾向行為の有無を予測するかを調べるため、2学期の低セルフコントロールと、2学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”、“安心感”、“本来感”、“被受容感”を独立変数、2学期の非行傾向行為の有無を従属変数とした。分析の結果、2学期の“低セルフコントロール”、2学期の居場所感の“安心感”の2変数で Wilks'λ が有意であった (低セルフコントロール Wilks'λ=.92, $p<.001$, 安心感 Wilks'λ=.91, $p<.001$)。標準化された正準判別関数係数は、“低セルフコントロール”が .90, “安心感”が -.29 であり、グループ重心の関数は、非行傾向行為“なし群”が -.17, 非行傾向行為“あり群”が .56 であった (Wilks'λ=.91, $p<.001$)。この結果は、1学期と同様、低セルフコントロールが高

Table 6 1学期の非行傾向行為の有無の1学期の低セルフコントロールと居場所感の各因子による的中率

	経験なし	経験あり
経験なし群 (N=968)	599 (61.9%)	369 (38.1%)
経験あり群 (N=224)	97 (43.3%)	127 (56.7%)

Table 7 2学期の非行傾向行為の有無の2学期の低セルフコントロールと居場所感の各因子による的中率

	経験なし	経験あり
経験なし群 (N=920)	626 (68.0%)	294 (32.0%)
経験あり群 (N=272)	102 (37.5%)	170 (62.5%)

Table 8 2学期の非行傾向行為の有無の1学期の低セルフコントロールと居場所感の各因子による的中率

	経験なし	経験あり
経験なし群 (N=920)	557 (60.5%)	363 (39.5%)
経験あり群 (N=272)	104 (38.2%)	168 (61.8%)

く安心感が低いと非行傾向行為“あり群”判別され、反対に低セルフコントロールが低く安心感が高いと非行傾向行為“なし群”に判別されるということを示している。判別の中率は、“なし群”が68.0%，“あり群”が62.5%、全体では66.8%であった（Table 7）。

最後に、1学期の低セルフコントロールと、1学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”，“安心感”，“本来感”，“被受容感”が2学期の非行傾向行為の有無を予測するかを調べるため、1学期のセルフコントロールと、1学期の家族関係に対する居場所感の“役割感”，“安心感”，“本来感”，“被受容感”を独立変数、2学期の非行傾向行為の有無を従属変数とした。分析の結果、1学期の“低セルフコントロール”，1学期の家族関係に対する居場所感の“安心感”の2変数で Wilks'λ=.94, $p<.01$, 安心感 Wilks'λ=.94, $p<.001$ 。この結果は、1学期のみ、2学期のみの結果と同様、低セルフコントロールが高く安心感が低いと非行傾向行為“あり群”判別され、反対に低セルフコントロールが低く安心感が高いと非行傾向行為“なし群”に判別されるということを示している。標準化された正準判別関数係数は、“低セルフコントロール”が.89, “安心感”が-.31であり、グループ重心の関数は、非行傾向行為“なし群”が-.14, 非行傾向行為“あり群”が.49であった（Wilks'λ=.94, $p<.001$ ）。判別の中率は、“なし群”が60.5%，“あり群”が61.8%、全体では60.8%であった（Table 8）。

分散分析の考察

(1) 非行傾向行為の変化前の特徴

非行傾向行為のタイプ別にどのような特徴があるのかを検討するために、“経験群”，“開始群”，“経験なし群”，“継続群”の4群で、“経験群”が非行傾向行為をやめる前であり，“開始群”が非行傾向行為の開始前である1学期に測定した変数について分散分析を行った。

すべての従属変数において、非行傾向行為の経験の有意な差がみられ、“経験なし群”は非行傾向行為を1回でも行ったことのある他の3群に比べるとセルフコントロールが高く、セルフコントロールが非行の抑止要因であるとする先行研究（小保方・無藤, 2005a）と一致する結果が得られた。また、“経験なし群”は他の3群よりも安心感が高く、家族に対して安心できるという感覚が非行を抑止する可能性が示唆された。さらに、“経験なし群”は1学期に非行傾向行為を行っていた“経験群”よりも役割感と被受容感が高く、また、1学期と2学期ともに非行傾向行為を行っていた“継続群”よりも本来感が高かった。以上の結果から、家族関係に対する居場所感が非行傾向行為の抑止要因になる可能性が示唆された。

女子において1学期に非行傾向行為を行っていない“経験なし群”と“開始群”は、1学期に非行傾向行為

を行っている“継続群”と“経験群”よりも役割感が高く、女子にとって役割感是非行傾向行為を抑止する要因となる可能性が示唆された。特に、1年生女子において“経験なし群”と“開始群”は“継続群”よりも、3年生女子において“経験なし群”は“経験群”よりも役割感が高く、1年生と3年生の女子にとって、役割感が高いことは非行傾向行為を抑止する要因となる可能性が示唆された。1年生は中学校に入学したばかりであり、つい最近まで小学校の最上学年としての役割を担っていたこともあり、家族からも頼られている感覚や役に立っているという感覚を得やすいからではないかと考える。また、3年生は最上学年であり、リーダーを任されたり先生や他学年から頼られる機会が多くなるため、実際にリーダーをしていたり頻繁に頼られたりする子どもとそうでない子どもとで、家族に対する役割感にも差が生じ、非行傾向行為へと繋がっているのではないかと考えられる。家族関係における役割感と学校における役割感に関連があるのか、今後検討が必要である。また、被受容感は、女子において“継続群”，“経験群”よりも1学期と2学期ともに非行傾向行為を行っていない“経験なし群”が高く、女子にとって家族に受容されているという感覚は長期的に非行を抑止するのではないかと考えられる。

(2) 非行傾向行為の変化後の特徴

非行傾向行為のタイプ別にどのような特徴があるのかを検討するために、“経験群”，“開始群”，“経験なし群”，“継続群”の4群で、“経験群”が非行傾向行為をやめた後であり，“開始群”が非行傾向行為の開始後である2学期に測定した変数について分散分析を行った。

すべての従属変数において、非行傾向行為の経験の有意な差がみられ、“経験なし群”は、1学期と同様に、非行傾向行為を1回でも行ったことのある他の3群に比べるとセルフコントロールが高く、セルフコントロールが非行の抑止要因であるとする先行研究と一致する結果が得られた。また、“経験なし群”は、2学期に非行傾向行為を行っていた“継続群”，“開始群”と比べると安心感、本来感、被受容感が高く、さらに、“経験なし群”は“継続群”と比べると役割感が高かったことから、1学期と同様に、家族関係に対する居場所感是非行傾向行為の抑止要因である可能性が示唆された。

役割感は、女子において“経験なし群”と“開始群”は“継続群”よりも高かった。“継続群”は1学期と2学期ともに非行傾向行為を行っている群であるが、女子の役割感に関しては、同じく2学期に非行傾向行為を行っている“開始群”とは異なる特徴を持っていることが明らかになった。また、1年生において“経験なし群”は“継続群”と比較すると役割感が高かった。青年期は、それまでの両親への依存から離脱し、一人前の人間としての自我を確立しようとする心理的離乳を迎える時期である（Hollingsworth, 1928）。しかし、中学1年生は青年期

に突入したばかりであり、まだ心理的に離乳できる状態には至っておらず、両親を含む家族に対する依存が大きい段階であるといえる。そのために、家族に対して役に立っているという感覚が、1年生の非行傾向行為に大きく影響を与えるのではないかと考えられる。さらに、3年生において、“経験なし群”は2学期に非行傾向行為を行っている“継続群”、“開始群”と比べると役割感、安心感、本来感が高かった。受験を控え、部活動などを引退し家庭で過ごす時間の多くなった3年生にとって、家族の役に立っているという感覚や、家族に対して安心できる感覚、本音で家族と関わり合える関係性が非行傾向行為を抑止するのではないかと考えられる。

判別分析の考察

1学期の低セルフコントロールと家族関係に対する居場所感の役割感、安心感、本来感、被受容感が、1学期の非行傾向行為の有無を、2学期の低セルフコントロールと家族関係に対する居場所感の役割感、安心感、本来感、被受容感が2学期の非行傾向行為の有無を予測するかを調べるため、判別分析を行った。

1学期、2学期ともに、非行傾向行為の有無を判別するには、“低セルフコントロール”と家族関係における居場所感の“安心感”の影響が大きいと示され、セルフコントロールの低い子どもは非行傾向行為を行う傾向にあることが明らかになった。これまでの研究で、非行とセルフコントロールの関連は示されており(Gottfredson & Hirschi, 1993; 金子, 2012)、この結果は、先行研究を支持する結果といえる。また、セルフコントロールが低く、安心感が低い子どもは非行傾向行為を行う傾向にあることが示された。矢川・森下(1999)は、児童において、不安が自己制御に負の影響を及ぼすことを明らかにしており、中学生においても、不安がセルフコントロールを低める可能性が推察された。

さらに、1学期の低セルフコントロールと家族関係に対する居場所感の役割感、安心感、本来感、被受容感が2学期の非行傾向行為の有無を予測するかを調べるため、分析を行った。1学期のみ、2学期のみの結果と同様に、2学期の非行傾向行為の有無を判別するには、1学期の“低セルフコントロール”と1学期の家族関係に対する居場所感の“安心感”の影響が大きいことが示され、1学期のセルフコントロールや安心感は、2学期の非行傾向行為の有無を予測する可能性が示唆された。

以上の結果は一貫しており、セルフコントロールや家族関係に対する安心感の高さは、一時的に非行傾向行為を抑止するだけでなく、長期的に非行傾向行為を抑止する働きをもつと考えられる。

総合考察

以上の結果から、一貫して、セルフコントロールは非行傾向行為を抑止する働きを持つことが明らかになっ

た。その働きは一時的なものではなく、1学期のセルフコントロールの高さは2学期の非行傾向行為を抑止するというように、セルフコントロールの高さはのちの非行傾向行為をも抑止する可能性が示唆された。

また、家族関係に対する居場所感と非行傾向行為の有無の関連が示され、特に、家族関係に対する居場所感のうち、安心感の高さが非行傾向行為を抑止することが示唆された。さらに、家族関係に対する居場所感セルフコントロールの規定要因である可能性が示された。家族関係に対する居場所感も、セルフコントロールと同様に、その働きは一時的なものではなく、家族関係に対する居場所感の高さはのちの非行傾向行為も抑止する可能性があることが推測された。

今後の課題と展望

本研究では、非行傾向行為とセルフコントロールおよび家族関係に対する居場所感に関して、中学生を対象とした短期縦断的研究を行ってきた。本研究ではまず、非行傾向行為の経験の群ごとの特徴を明らかにするために、非行傾向行為の経験の有無により、経験なし群、継続群、経験群、開始群の4つの群に群分けしたが、最も人数が少ない継続群が18人と全体の1%にも満たず、経験群、開始群にいたっても全体の3%前後であった。そのために、明確な結果が得られなかった可能性も考えられる。調査協力者の数を増やし、非行傾向行為のタイプごとの特徴を再検討する必要がある。非行傾向行為のタイプごとの特徴がより明確になれば、非行傾向行為の予測が容易になり、より一層の非行の予防、減少へと繋がることが期待される。

また、家族関係に対する居場所感について、本研究では、家族を“ふだん一緒に生活している人”と定義した。しかし、家族構成やその形態は各家庭によって異なり、子どもたち一人ひとりが、どのような関係を“家族”と捉え、その家族と具体的にどのような関係性にあるのかが明確でない。久原・宮寺(2012)において、片親同居の非行少年と両親同居の非行少年とは異なる結果が得られたことを考慮すると、今後、家族構成やその在り方なども併せて検討していく必要がある。

本研究では、セルフコントロールを抑止する要因として家族関係に対する居場所感のみについて検討したが、学校現場において、家族のあり方に介入していくのは容易ではない。石本(2008)において、大学生で、家族関係や恋人関係において居場所がないと感じていると、インターネット上の友人関係へと居場所を求める可能性が示された。また、光元・岡本(2010)では、母親に対する心理的居場所感が低い青年では児童期までほとんど心理的居場所がなく、思春期以降、友人や恋人が心理的居場所として機能するようになることが示唆された。つまり、思春期以降は、ある関係において居場所がないと感じていても、それ以外の関係において居場所を求めるこ

とでその不足を補おうとしているということであり、居場所感は、他の関係に対する居場所感と相互に補い合うことができる可能性が考えられる。学校現場において比較的介入しやすい学校や友人関係に対する居場所感も測定し、家族関係に対する居場所感が学校や友人関係に対するものと相補的な役割を果たすことが示されれば、学校現場において、居場所感を高めるために具体的な介入を行って行くことが可能になる。また、本研究において、家族関係に対する居場所感は、学校における居場所感から何らかの影響を受ける可能性が示唆された。このことから、家族関係以外に対する居場所感についても検討し、それらが家族関係に対する居場所感にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることで、非行傾向行為のある少年にどのような点から介入していけばよいのかがより明確になる。これらの点について検討していくことは、今後の非行臨床に役立つものとなると考えられる。

最後に、本研究では、中学生において、家族関係に対する居場所感が非行傾向行為を抑止するセルフコントロールを規定することが明らかになった。従来の研究において、自我が確立されていない思春期の青年の居場所づくりには、その場に必ず他者の見守りのまなざしが注がれていなければならないこと（川島，2004）や、居場所を保証する大人がいること（矢野，2006）が指摘されてきた。このことから、家族が常に子どもを見守り、どんな状態であろうとも子どもを常に受け入れる存在である必要があるだろう。しかし、現代社会において、核家族化や一人っ子の増加、共働きの増加などにより、家族の規模は縮小する傾向にある。そんな現代において家族ばかりにその機能を求めるのは、負担が大きすぎるのではないだろうか。こんな現代だからこそ、地域や学校におけるコミュニティを重視し、みんなで子どもを育てていくことが重要であると考えられる。

引用文献

ゴットフレッドソン, M.R.・ハーシー, T., 松本忠久(訳) (1996). 犯罪の基礎理論 文憲堂

Grasmick, H.G., Tittle, C.R., Bursik, R.J. Jr., & Arneklev, B.J. (1993) Testing the core empirical implications of Gottfredson and Hirschi's general theory of crime. *Journal of Research in Crime and Delinquency*, 30, 5-29

法務省 (2004). 再犯防止対策の在り方 平成 16 年度版 犯罪白書 大蔵省印刷局 pp.44-54.

法務省 (2011). 少年・若年犯罪者の実態と再犯防止 平成 23 年度版犯罪白書 大蔵省印刷局 pp.40-73.

Hollingworth, L. S. (1928). *The Psychology of Adolescent*. New York : D. Appleton Century Company.

藤川洋子 (2005). 非行のメカニズムを読み解く 一少

年犯罪の深層— ちくま新書

石本雄真 (2008). 居場所感に関連する大学生の生活の側面 神戸大学大学院

人間発達環境学研究科研究紀要, 2, 1-6. 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.

金子泰之 (2012). 問題行動抑止機能と向学校的行動促進機能としての中学校における生徒指導—一般生徒と問題生徒の比較による検討— 教育心理学研究, 60, 70-80.

加藤弘通・大久保智生 (2006). 問題行動をする生徒および学校生活に対する生徒の評価と学級の荒れとの関係: 困難学級と通常学級の比較から 教育心理学研究, 54, 34-44.

川島美保 (2004). 慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもの仮の居場所づくり 高知大学学術研究報告, 53, 29-40.

久原恵理子・宮寺貴之 (2012). 非行等の問題を呈する少年の家族機能の特徴について 日本心理学会大会発表論文集 461.

松木太郎 (2011). 大学生における心的居場所と攻撃性との関連 日本青年心理学会大会発表論文集, 24-25.

光元麻世・岡本裕子 (2010). 青年期における心理的居場所に関する研究—心理社会的発達の視点から— 広島大学心理学研究, 10, 229-243.

文部科学省初等中等教育児童生徒課 (2013). 平成 24 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について 文部科学省報道発表資料

森下正康 (1999). 幼児期の自己制御と思いやり・攻撃性, 親子関係との関連 日本教育心理学会論文集(41), 236.

森下正康 (2003). 幼児の自己制御機能の発達研究 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 13, 47-56.

森下剛 (2004). 中学生の非行行動に関連する要因についての探索的研究—学校における非行防止プログラムの開発に向けて— カウンセリング研究, 47, 135-145.

則定百合子 (2007). 青年版心理的居場所感尺度の作成 日本教育心理学会総会発表論文集, 337.

越智啓太 (2004). 学校への愛着形成は非行抑制要因になるのか—非行の自己申告データの分析— 日本教育心理学会総会発表論文集, 654.

小保方晶子・無藤隆 (2005a). 中学生の非行傾向行為の先行要因—1 学期と 2 学期の縦断調査から— 心理学研究, 77, 424-432.

小保方晶子・無藤隆 (2005b). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, 16, 286-299.

崔玉芬・庄司一子 (2009). 親の養育態度と中学生のセルフ・コントロール—中国と日本の比較分析に基づいて— 日本教育心理学会論文集 (51), 322.

清水賢二 (1999). 現代少年非行の世界—空洞の世代の誕生 少年非行の世界—空洞の世代の誕生 有斐閣 pp.1-35.

矢川晶子・森下正康 (1999). 児童期の自己制御の発達と不安感・コンピテンスとの関連 日本教育心理学会

論文集 593.

矢野泉 (2006). アジア系マイノリティの子ども・若者の居場所づくり 横浜国立大学教育人間科学部紀要教育科学, 8, 261-273.

(2014年9月1日受付)

(2014年10月8日受理)